

遙かなる賭け 木下充矢

(Tゼロ 西暦二〇三一年 沖縄科学技術大学院大学 統合群集情報学ユニット長オフィス)

南国特有の、あざやかに青い海と空。濃い緑の森に点在する居住棟の、リゾートホテルのような洗練されたデザインのオレンジの屋根がよく映える。恩納村の海岸線を見下ろす窓外の絶景に、ふと我を忘れそうになった。首を振り、開襟シャツをそつなく着こなした国連官僚は、目の前の茶褐色のぼさぼさ頭の少女にいった。

「報告書は拝見しました、マーサ・タルボット博士」

「マーサ、でいいです、中田さん」少女は、見かけに似ない低く落ち着いた声でいった。えり抜きの研究者が揃ったOIST（沖縄科学技術大学院大学）の中でも、マーサはその経歴で異彩を放つ。世界的研究機関のユニットリーダーに十代で着任した若き天才に、中田はどう接していいのか戸惑っていた。

「もし事実であれば、いうまでもなくこれは最大級の重大事件です。まずは、『金星メッセージ』の真实性を再確認したい。これは、あまりにも、その……」

「現実離れしている？」マーサが、少し口角を上げていった。

「率直に言って、その通りです。L i n c o s は、地球外知性との交流を目的に設計された人工言語だと聞いています。所詮は、人類の数ある言語のひとつ。それを使って、地球外知性がメッセージを送ってくる。いくらなんでも、ちょっと都合が良すぎませんか？」

「誰かの仕組んだ、たちの悪いジョークではないか、と？」

「はい」

「そこには、疑問の余地はありません。私たちはまっさきにそれを疑って全てのデータフローの相互チェックを繰り返しました。柏、テジョン、カーディフ、ボストン、そしてここ。関係する研究者の結論は一致しています。守秘契約のうえで、外部の独立した三つの情報セキュリティ調査機関による監査も受けています。ご承知のとおり」

中田は、深くため息をついた。ジョークだったらどんなによかったか。前例まったくなし。これから待ち受ける複雑怪奇な手続きの山また山。

「受け入れるしかないんですね、これを」中田は、テキストを指して、あきらめ混じりにいった。タブレットと書籍と情報機器が雑に積み上げられ、合間にマーサの趣味らしい大小さまざまな「必勝だるま」が点在する研究室の中で、一カ所だけなにも置かれていない白壁の、全面に投影されたテキスト。

マーサは、右手でそれを指し示した。

「まず、これをご覧になるのがよいと思います」

画面の最初のページには、こう書かれていた。

【特記事項】

・本テキストは、金星知性体が成層圏エアロスタットで最後を迎えた日の、非公式の覚え書きとされる文書の翻訳である。原文はL i n c o sで記述。翻訳には、金星メッセージ自体に含まれる『拡張版L i n c o s・英語対訳ライブラリ』を使用した。地球人類的感覚を思わせる語彙が散見されるが、本テキストは逐語訳であり、これらの語句は発信者自身が選択したものであることに特に留意されたい。発信者の『真の』メソタリテイ説明は今後の課題である。（マーサ・タルボット、O I S T）

(Tマイナス十一・四億金星年「七億地球年」 金星成層圏エアロスタート)

茶褐色の濃淡の渦が、怒りにまかせてかきまぜた顔料のように、超大型成層圏気球の眼下の観測窓一杯に広がっていた。これが、あの白と紺青だった星のなれの果てか。何度見ても、呼吸囊に痛みが走る。二度と戻ることのかなわぬ、変わり果てた故郷。

降下カプセルのスラスターの青白い輝きが、かすかに見えた。夜の半球を最終キャニスターのエントリーポイントに選んだのは、それを最後に見送るわれわれの、ささやかなわがままだ。

二十年前に始まった、巨大な規模の火山活動、「破局噴火」。連鎖的にこの星の全球を覆い尽くしたそれは、私たちの産業活動によってもたらされた量をはるかにしのぐ二酸化炭素を放出した。粉塵による短い寒冷期ののち、温室効果の暴走が始まった。我々は、長きにわたって私たちの生存を支えてきたこの星の本性を知った。いかなる生命にも地表での生存を許さない、酷薄な姿を。

残された時間と資源の全てを、私たちは高層大気への脱出に振り向けた。大型エアロスタットが全部で三つ。合計で千名近くが暮らすことができ、必要物資の自給も十年以内には目処が立つと期待された。問題はただひとつ。そのたった十年が、私たちには残っていなかった。最後の補給船が成層圏に到達してから三年が経過して、私たちはついに悟った。我々は「ここまで」だ、ということに。物資欠乏による不可避の死までの残り時間は五十年と予想された。だから、私たちは賭けた。クラウドへの「アップロード」に。金星高層大気の微生物生態系に、群知性型超並列プロセスを構築することに。

「キャニスター分離します」管制員が、そつと、ささやくように外皮の輝度を変調させて『言った』。同じ映像を、地下シェルターの生き残りの同胞たちも、きつと見ているはずだ。われらの最後の希望。たよりない、やぶれかぶれの賭けの終幕を。

光点が、さらに小さな粒に分離した。三つ、五つ、見る間にそれは、数十、数百、いや、それ以上の微細な輝点に分かれ、そして、見えなくなった。

クラウドからのメッセージが、相次いで管制室の情報照明を満たした。地上拠点からの個体情報アップストリーム、順調。クラウドの容量拡張は計画通り進行中。五十年後の「シャットダウンタイム」に向けた低クロック運用への移行はまだ立案段階だが、期限内には充分完了できる。地上の高地に分散配置されたバックアップアーカイブ施設はまもなくフェイズ2、完全自律運用チェックポイントをクリア。

『というわけです。みなさんのこれまでの尽力を、われわれデータ市民の誰ひとりとして忘れることはありません。再会を楽しみにしています』クラウドコミュニティ首班は、そうメッセージを締めくくった。もう、ここですることはほとんど残っていない。ただ一つを除いて。

「これで任務完了だ」制御端末を閉じて、私は大きく左右の主腕を上に向かって伸ばした。「では諸君。下がらせてもらおうよ」腹甲の会話膜をゆるやかに明滅させると、私は腹脚を伸ばしてピットから身を起こした。

他のスタッフも、てんでにピットを離れ、居住区画に歩み出していく。親しいものたちと最後の時を過ごすもの。一人静かに、失った人や場所に思いをはせて最後の時を過ごすもの。

「主任！『さよならパーティー』が始まりますよ！ 来ませんか？」

同巢の個体が、淡い緑色光で声をかけてくれた。鮮やかな青に黒い斑点の混ざった外殻がところどころけばだっていて、痒そうだ。はがれた古い殻の断片を、せわしなく鉤爪で摂食器に運んでいる。プロジェクトのために無理に脱皮の時期を遅らせていた薬が、切れたのだろう。

「ちよつと、用事があつてね。あとで寄らせてもらおうよ」

最後の仕事を終え、発光会話でざわめき始めた管制を出ると、エアロスタットの通路は暗く、静まりかえっていた。無理もない。プロジェクト要員は、手の空いたものから順次、二度と覚めることのない眠りについていた。記憶を『破壊読み出し』するための分子機械製剤の服用。私たち二十名に満たない「居残り組」に、水と酸素と電力を残すために。それも今日で終わる。あと一つだけ、個人的な用件を済ませれば。

エアロスタットの発着デッキに入った。耐酸性細菌キャニスターの放出を全て終えて、デッキは閑散と少しいた。壁際が一番奥に、横倒しにぼつんと取り残された銀色の円柱形。仲間たちと、長いことかけて少し

ずつ組み上げてきた、粗末なつくりのロケット。そして、その前に、意外な人物が立っていた。監察官だ。エアロスタットの治安を司る官吏。そのたくましい右の主腕には、携帯武器が握られている。武器は、まっすぐ私に向けられていた。

「『長い尾鰭』技術主任。お仕事は終わりましたか？」監察官は鋭い赤色光で問いかけた。

「ああ。最後のキャニスター放出をいま終えたところだ。ところで、その物騒な代物について、説明してくれないか？『鋭利な鉤爪』監察官」

「無礼は承知しています。率直に伺います。主任、あなたはこのロケットで何をしようとしているのですか？公の機材リストに全く記載のない、このロケットで。お答え次第では、わたしはあなたを拘束しなくてはなりません。コミュニティに対する反逆の罪で」

面倒なことになった。若い、素朴な使命感を、目柄の先端の人並みはずれて大きな視覚球にみなぎらせて、監察官は一步、私に近づいた。

「まず、はつきりさせておこう」抵抗の意志がないことを示すために、私は、第一から第三までの腕を斜め後ろに向けた。

「この機体は、私と仲間たちの純粋な私的活動の産物だ。『永眠計画』にはいつさい、影響を与えていない」
「それは承知しています。正規の手続きで払い下げられたものばかりだ。でも、趣味の範囲を少々逸脱しているのではありませんか？ 第三惑星に光合成バクテリアを撃ち込む、というのは」

「いいだろう。少し時間はあるかね？」私は、主腕でデスクに隣接した発令所を指した。

発令所に入った私は、情報照明を立ち上げた。データを読みとる監察官の視覚球に、黒いスリットが数度、せわしく走る。

「もう知っているかもしれないが。これが、あのロケットで私たちがやろうとしていることだ」

「第三惑星への光合成微生物の散布、大気組成の富酸素化の促進、ですか。主任、あなたが光合成微生物による気象改造を長年研究してきたことは知っています。私たちの世界を救うにはもう手遅れだ、と結論づけられたことも。ご無念はわかりますが……しかし、なぜそれを第三惑星に？」

「簡単なことだ。あの星なら、まだ間に合うかも知れないからさ」

私は情報照明を経由して、監察官に第三惑星の気象サイクルを示した図を示した。

「あの星は、私たちの星よりも生態系が幼い。そして、脆い。全球凍結に続く大陸の分裂で、海嶺からの二酸化炭素放出が激増している。温室効果暴走の前兆だ。このまま、この星のように灼熱の『死の世界』になり果てる可能性も少なくない。でも、もし、我々のバクテリアが介入すれば？ 運命を、ひっくり返せるかも知れない」

「私たちの星に散布したのとは別の菌株ですよね。アンモニアを分泌して強酸性の環境から身を守るしくみを、あなたのバクテリアは持っていない。光合成に特化している」監察官に学術分野の経歴があることは知っていた。私は、監察官の知的好奇心に賭けた。

「そうだ。同じことを繰り返しても面白くないし、最善でもない。あの星は、まだ後戻りできるかも知れない。液体の海を持つ、地表で生態系が繁栄できる星に。いますぐに、十分な光合成効率を持つ微生物を投入してやればね」

監察官は、腹甲の会話膜に驚きの青い発色を浮かべ、両の主腕を降り動かした。

「神様にでもなるつもりですか？ わたしたちの運命と何のかかわりもない隣の惑星で、生態系の危機を救う。土着の生態系はどうなります？ あなたが将来、外来生物による生態系汚染の責任者として断罪されないという保証はありますか？」

「そんなものはないさ。ただね。悔しいじゃないか。せっかく育て上げたバクテリアを、灼熱化するこの星で見殺しにするのは。それに。君は、知りたくはないか？ 強い磁場で宇宙放射線から保護された世界では、どんな思いもよらない生命が育つのか、を」

「あきれた」監察官は、処置なし、というように、全ての腕をぐるぐると大きく振り回した。

「つまり、こういうことですか？ 手塩にかけた光合成バクテリアを見殺しにするのは可哀想だから、生き残れそうな隣の惑星に逃がしてやろう。それがきっかけであの星にユニークな生き物が育ったら、面白そうだ。それが、主任、あなたとお仲間の目的なのですか？」

「そういうことだ」

「コミュニティへの責任はどうなります？ 『永眠計画』への」

「それは充分果たした。手抜きはしていない。それに。これは『永眠計画』の将来への布石でもある」

私は、画面を切り替えた。

「『永眠計画』の要石は、成層圏気球だ。微生物群知性の演算結果を統合・再配分する機能。しかし、これはあと五十年も保たない。私たちには、補給なしで持続できる成層圏エアロスタットを構築する力がなかったからだ。遅くとも五十年後には、この星の仮想社会は崩壊する。成層圏気球の機能停止とともに」

「それは……そんなことは誰でも知っています。それでも、微生物のコロニーは私たちの種族記憶を受け継ぐ。それは無意味なことではない。いつの日か、遠い世界からの来訪者が、私たちの記憶を呼び覚ましにやってくるかも知れない。それに賭けよう。そうではありませんか？」監察官は、挑むように、また、自分に言い聞かせるかのように、言った。

監察官は、……この子は、知らないのだ。私は、刺すような痛みを呼吸囊に感じた。この子の世代が物心ついた頃にはもう、この星の干渴は、保護装具なしで出歩けるような場所ではなくなっていた。幼生時代を、海ではなくシエルターの水槽で過ごした世代だ。凧いだ海面に写るきらめく星空を、この子は知らない。来るべき破局と、それに抗う大義の遂行で、何もかもが埋め尽くされていく、その前の営みを、この子

は知らない。私自身も忘れかけていた、終末をまだ知らなかった頃の暮らしを。生きる目的がひとりひとりの個体に委ねられていた頃の生活を。

「そこでだ。はるかな未来、もしも、第三惑星に知性と文明が生まれたとしたら。彼らが、私たちの記憶を呼び覚ましに、この星を訪れるかも知れない。そうは思わないか？」

ふつ、と、監察官の表情発光が淡くゆるんだ。主腕よりも長いしなやかな触覚と、四つの目柄が、笑みを含んでゆらゆらと揺れる。

「とんだ大博打ですね」監察官は武器をおろし、ホルスターにしまった。

「と、いうわけで。もしも良かったら、なんだが。手伝ってくれないか？」

「何をですか？」

「もう、『蒔種計画』の関係者で目覚めているのは私一人だ。一人でもできるが、楽ができるならありがたい。ロケットの射出に、手を貸してくれないか？」

監察官は、やや捨て鉢気味にいった。

「いいですよ。もう仕事ありませんから」

発着デッキのメインハッチが、ゆっくりと下向きに開く。眼下には、昼夜境界線。頭上には、輝く星々。その中でひととき強く輝く、青い小さな点。「蒔種計画」の目的地、第三惑星。

「これから燃料注入チューブを外す。私が退避ステーションに入ったら、打ち上げシーケンスの起動ボタンを押してくれ」

簡易な気密マスクしか付けていないので、酸性度の上がってきている外気で体の節々がヒリヒリする。短時間なら大丈夫だが、あとでよく中和剤を擦り込んでおかないといけないな。

「発射シーケンス、すべて順調」監察官が発令所の窓越しに外皮を緑に明滅させた。「退避を完了したら、教えてください」

「退避、完了した」退避ステーションの分厚い防爆扉をロックすると、私は白いまたたきで答えた。

「では、カウントダウン開始します。十。九。八。……」

どう、と、力強い振動がデッキを満たす。何年もかけて、仲間たちとこつこつ手作りしてきたロケットが、エアロスタットから青い炎をけたてて離床する。はるか彼方の青い星をめがけて。

資源をかけられない計画だから、時間はかかる。ソーラーセイルを展開してゆっくりと速度を上げ、まず、小惑星にたどりつく。我々の第二惑星と第三惑星の間を往き来する、好都合な軌道を持つ小惑星に。そこで、あとはひたすら、第三惑星の公転軌道との交錯を待つ。そして、時が満ちれば、ロケットは光合成微生物を満載したカプセルを、第三惑星めがけて放出する。

「青い星」に私たちのバクテリアが到達するころには、このエアロスタットに目覚めているものはいまい。もしかしたら、エアロスタット自体も、浮力を失い、灼熱の地表に舞い戻っているかも知れない。それでも、私たちの光合成バクテリアは生き延びる。きっと。

発着ゲートの巨大なメインハッチが、せり上がって閉じた。中和剤の散布が終わり、私は退避ステーションから歩み出した。もう、呼吸マスクはいらない。発令所からは、監察官が出てくるところだった。

「さて。お互い、もう仕事は終わりだ。そうじゃないか？」

「そうですね」

「なら、一緒に行かないか？ 『さよならパーティー』に誘われているんだが」

「行きますよ、どこへでも。もう、報告を上げる先ありませんしね」

「ここだけの話だがね。司厨長が、最後まで取っておいた高級食材を放出するらしい。天然物を」

「え」監察官の呼吸囊が、ひく、と動いた。

「しかもだ。ナマ、だそうだよ」

「それは聞き捨てなりませんね。緊急査察に値します」監察官は、私の記憶にある限り初めて、会話膜を白い輝点で埋めて大きく笑った。

(Tゼロ 西暦二〇三一年 沖縄科学技術大学院大学 統合群集情報学ユニット長オフィス)

「彼らの肉体が、大型甲殻類に似たつくりを持っていたこと。音声言語は発達せず、主なコミュニケーション手段は体表全体にちりばめられた発光器官で、その帯域幅の広さが彼らの『マインドアップロード』に決定的メリットをもたらしたことはおそらく確実なのですが。『主任』と訳した個体と『監察官』と訳した個体がどんなメンタリテイを持っていたのかは、正直判りません。今後の研究に待つしかない」

「人類の、いや、地球生態系そのものの発端に金星知性体が関与していた、と、彼らは主張しているのですか？」中田は、上気した顔をマーサに向けた。

「はい。彼らの言葉を信じるならば」

「そこに、疑問があります」中田は、鋭い目をマーサに向けた。

「このメッセージが実際に金星探査機から届いた、ということ。それは認めます。しかし、それと、メッセージの内容が真実である、ということはイコールではない。このメッセージが、探査機の人工知能プロセスによってひねり出された『作話』ではない、という証拠はありますか？ 数年前に大きな社会問題を引き起こした、初期の大規模言語モデル型人工知能。事実よりも聞き手への迎合に走る傾向を強く持っていたそれと似たようなことが、起きたのかも知れない。聞きたい話ばかりを無限に供給する『うぬぼれ鏡』のようなことが」

「その可能性は、確かにあります。慎重に検証されるべきですし、そうするつもりです。しかし、それは大きな問題ではない、と、私は考えます」

「なぜですか？ 私にはそうは思えないが」

「ちょっと唐突に聞こえるかも知れませんが。どんな出自の存在なのか、よりも、何ができる、どんな性質の存在なのか、ということのほうが、はるかに重要だからです。彼らの示唆で達成されたリーマン予想の解決は一例にすぎない。『金星・探査機』の複合システムが、高い知的能力を備えた非人類知性であることは、疑問の余地はありません。それが、探査機の見た幻に由来するものなのか、それとも金星知性が本当に七億年を生き抜いたのか、には関係なく。それに、物証は揃いつつあります」

マーサは、画面を切り替えた。

「地球と金星の公転軌道の間を行き来する軌道を持つ小惑星は実在します。それを、ナンシー・グレース・ローマン宇宙望遠鏡で詳細観測した画像がきのう届きました」マーサは、画面を切り替えた。岩塊にめり込んだように見える、円筒形状が大写しになった。

「かなり風化が進んでいますが、これが、七億年に地球のカンブリア爆発を引き起こしたトリガーの遺構だと、私たちは考えています」

中田は目を見開いて、その画像を注視した。

「では。金星知性体は、ほんとうに……？」

「断定するのはまだ早いですよ」マーサは、にっこりとほほえんだ。

「この小惑星の、いかにも人工物らしいユニークな形状。それが、今回の観測より前に、どこかの経路から金星探査機に流れついたのかも知れない。妄想の翼をはばたかせたAIが、『金星メッセージ』を丸ごと無から作りだした可能性は、まだ完全には排除し切れていません。小惑星の現地踏査が必要です。それでも、『作話仮説』の可能性はかなり下がった、と私は思います。……こちらは、『金星メッセージ』の、もう少しフォーマルな部分の翻訳です」

そこには、こう書かれていた。

『そもそもの最初から話そう。今から七億年前の地球の夜空には、いまの白い濃硫酸の雲に覆われた星とはまるでちがう、青い惑星が輝いていたはずだ。地球と双子の兄弟のような、液体の海洋を持つ惑星。それが私たちの暮らした金星だった』

メッセージは、突如発生した全球規模の巨大な火山活動によって高温高圧の死の世界となり果てた金星の運命を物語った。成層圏気球に避難した千人に満たない金星知性体にも完全な自給自足の技術はなく、手持ちの資源は五十年金星年（約三十一年地球年）で尽きると予測された。

中田は身震いした。国連職員として幾度も国際紛争の難民支援に参画した経験のある彼にとって、物資欠乏の恐怖は決して他人事ではなかった。このメッセージの書き手に、中田は不意に強い同情を覚えた。

『……だから、私たちは賭けた。眠りと、夢と、その先の目覚めに。当時から、金星の高層大気には、微生物のコロニーがあった。微生物の生態系に「間借り」して、超並列プロセッサを構築する計画が立案された。ひとつひとつの微生物の機能は単純なものでいい。生き延びて、繁殖して、死ぬ。その子孫が、また生き延びて、繁殖して、死ぬ。それらが、微弱な電磁波で情報をやりとりする。ちょうど、生物の神経細胞が電気信号で情報をやりとりするように。惑星規模の「脳」を、微生物の雲の中に作り出そう、という、当時の私たちの技術水準からすると空想的としか言いようのない計画だった。しかし、私たちに、他に道はなかった』

「金星には磁場がありません。大気プラズマに由来する、ごく弱い磁場はありますが、地球の生態系を宇宙放射線から保護している強大な磁場とは比較にならない。私たちは、これが金星と地球の運命を決定的に分けたと考えています」マーサは、中田に向き直って、いった。

「なぜ、金星には磁場がないのか。それは、言い換えればこういうことです。なぜ、地球には磁場があるのか？ 月が形成されるきっかけになった、四十億年前の地球への小天体の衝突。それによって、地球の地殻はほどよく分断され、プレート運動とコア流動が始まった。地磁気の誕生です」コア流動の動画に、画面が切り替わった。

「一方、金星にはそのような幸運は訪れなかった。コアの冷却に伴う地殻の歪みは、プレート運動によって小刻みに発散されることなく……」

「一気に、破局が訪れたのですね」中田は、ため息をついた。

「ええ。重金属を豊富に含んだ外骨格で宇宙放射線から身を守っていた金星知性体も、『破局噴火』にはなすべがなかった。ただひとつ、クラウドへの避難、という道を除いて」マーサは、メッセージの続きの部分を表示した。

『微生物をキャリアとする情報システムを立ち上げて、そして存続させる。それだけが当面の目的だった。情報クラウドの演算結果を統合・再配分する機能は成層圏飛行船が担っていたが、これは君たちの暦で三十年ほどこしか保たなかった。私たちには、それが限度だった。種族記憶のアップロードさえできれば、あとは「塩漬け」状態でかまわない。誰かがやってきて、それを読み解いてくれるまで。ただ、「保険」はかけさせてもらった。七億年前の、全球凍結の反動で灼熱化し始めていた君たちの青い星への、光合成バクテリアの散布。そして、長い進化の果てに、君たちの送り込んだ探査機が私たちの欠落を埋めてくれた、というわけだ』

「広域コミュニケーション手段を失って大幅に『思考速度』を落としながらも、クラウド知性は生き延びました。彼らは、金星地表に残した少数の自動機械を使って、思考の成果を蓄積し続けていたようです」

マーサは、金星の地図を画面に映し出した。標高の高い地点に、赤い輝点がいくつも記されていた。

「ラクシユミー高原。トゥラン高原。標高が高く、熱と気圧のストレスが相対的に穏やかな場所に、彼らは『アーカイブ』を設けました。金星の活発な地殻変動によって多くが失われましたが、運良く隆起によって高山になった場所には、状態のよい『アーカイブ』が残されている可能性がある、と彼らは主張しています」

マーサは、ポインターで赤い輝点のひとつをさし示した。

「特に、金星最高峰のマックスウェル山。ここには、全天観測記録が残っている可能性が高いのだそうです。自分たちの体を光学センサとして積み上げた、実に七億年分の、太陽系の記録が。太陽系のすべての惑星、太陽系を訪れ、去っていった恒星間天体、そして、深宇宙の数々のイベントの記録が」

興奮をさますためか、マーサはそこで一旦席に戻り、コーヒーをすすった。

「一方、温室効果暴走で壊滅目前だった地球生態系は、金星知性が送り込んだ光合成微生物によって息を吹き返しました。富酸素化により温室効果は抑制され、地球生態系は、多細胞生物の劇的進化『カンブリア爆発』を迎えます」

マーサは、画面を切り替えた。「五大量絶滅」というタイトルの画像を背に、マーサは語った。

「カンブリア爆発は、決して『ハッピーエンド』などではありませんでした。むしろ、苦難の歴史の始まり、に近い。地質時代に、地球生態系は、少なくとも五回の『大量絶滅』を経験しています。そのたびに姿を変え、より多様に、より打たれ強く、地球生態系は生き延びてきました。そして、七億年が過ぎ、私たちは惑星探査に手を伸ばします」

マーサは大きく息をついた。

「金星探査そのものが、苦難と失敗の連続でした。一九六一年に始まった金星探査は、金星フライバイ初成功までに六回、失敗しています。その後も、一九六七年の大気圏突入観測までに続けて十回の失敗。二〇〇一年のJAXAの『あかつき』も失敗だった。誰もがそう思ったそうです。金星周回軌道に投入するという瀬戸際での、主スラストノズルの爆発と喪失。致命的です。でも、『あかつき』の関係者は諦めなかった」

「知っています。たしか、絵本になっているのですよね」

「ええ。『「あかつき」一番星のなぞにせまれ!』。子供の頃にこの本に出会っていなかったら、私は今の仕事はしていなかったと思います」デスクに立てられている、まさにその絵本を、マーサは指さした。

「誰もがもう無理だと思ったミッション。失われた軌道投入手段。でも、少しでも可能性が残っていたら、それを追い求めるのが人間というものです。姿勢制御エンジンのわずかな推進力を振り絞り、実に五年もかけて、『あかつき』は金星周回軌道に入りました。そして、『スーパーローテーション』のメカニズム解明、という大目的の達成。私は、有名な『はやぶさ』にも匹敵する偉業だと思っています」

「日本の宇宙開発予算は限られていますからね。かつてのソビエトやアメリカのような、『駄目でも次』は許されない。良くも悪くも、最後の最後まで、投げ出すことはできないんです」

「同じことですよ。五回の大絶滅を乗り切った私たちも、七億年前に滅びの運命を拒んだ金星知性も。……私は思うんです。地球が『生命の星』であることは、『ハビタブルゾーン』のどまんなか位置したがゆえの必然などではない、と。いつ、滅んでもおかしくはなかった。これまでも。そして、これから。でも、私たちも、彼らも、諦めなかった」

マーサは中田に向き直って、言った。

「金星は謎の多い惑星です。地球の一年の七割もかかる、異様に遅い自転周期。自転速度の六〇倍に達する猛烈な速さで吹き続ける惑星規模の東風『スーパーローテーション』。太陽エネルギーの実に半分を吸収する未知の物質。十年で二倍も変化する紫外線の反射率。長い間、科学者たちを悩ませてきたそれらの謎の解明が、半世紀以上も根気強く続けられた金星探査計画の大目的でした」マーサは強い視線を中田に向けた。

「謎は解けました。いまなら断言できます。金星では、有機マイクロマシンによるテラフォーミングが今なお進行中なのだ、と」

中田は声を失った。

「『あかつき』が明らかにした紫外線吸収物質の存在。二〇一九年の、アルマ電波望遠鏡による生命指標物質ホスファインの金星高層大気からの検出。二〇二一年に提唱された、結核菌のようにアンモニアを分泌して強酸性環境から身を守る微生物エコシステムの仮説。二〇二三年五月にMITが民間企業と組んで送り込んだ、たった一キログラムの、しかし生命活動検出に的を絞った超小型探査機。それらの成果をもとに、二〇三〇年のNASAの金星探査機には、当初の計画にはなかった飛行船型無人探査機が追加されました」

「そして。二〇三〇年から始まった、合成開口レーダーによる金星精密地図作製の試みが、金星クラウド知性の『失われたピース』を埋めたのだ、と私は考えています」マーサは、画面を切り替えた。

「NASAとESAによる、複数探査機の連携観測。それを集約し分析する目的で搭載されたエッジAI。AIには、観測時間の一定割合を「自己裁量」の独自調査に割り当てる権限が設定されていました」

マーサは、インフォグラフィック動画を再生した。点と線が絡み合った、子供のいたずら書きのような、または、仏教の曼荼羅のような動画を。彼女は、スクリーンの前に仁王立ちになり、うねうねと脈動する線画に人差し指を向けた。

「探査機のネットワークが、フィードバックループを再構築しました。これはリアルタイム動画です。わたしたちの探査機を系の一部に取り込んだ、金星クラウド知性の」

中田は、スクリーンを凝視してつぶやいた。

「『登り回線』の、金星気象の画像。そこには、微生物コロニーの活動が反映されている。そして、『下り回線』の、探査機が放つレーダー波の強弱。そのキャッチボールの積み重ねで、惑星サイズの『思考』が実現する。そういうことですか？」

「その通りです。……彼らがL i n c o sをコミュニケーション言語に選んだことには、何の不思議もありません。N A S Aのダヴィンチ・プラス探査機にはL i n c o sの辞書ライブラリ一式が積み込まれていたのですから。『もしも、ファーストコンタクトが実現したら』という、学生実験プロジェクトの一つとして。それが『彼ら』の系の一部である以上、『そこにあるものを使う』のはごく自然なことです。ただ……」そこで、マーサは少し笑った。

「別に、英語でもハングルでも日本語でもよかったのに。間違いなく、彼らは私たちの自然言語を深く理解している。たぶん、あえてL i n c o sを使うことで、彼らは彼らなりの『礼儀』を表現しているのだと思います。でなければ、ひねくれたユーモア感覚を。『らしく』振る舞ってやっているんだよ、という」

「なんだか、馬鹿にされている気分ですね」中田は、不服げにつぶやいた。

「まあ、そこは大目に見てやりましょうよ。年寄りには敬っておくものです。なにしろ、彼らは七億歳年上なのですから」

「彼らの賭けは、報われたんですね」中田がいった。

「ええ。七億年の賭けが」

金星クラウド知性がもたらした、膨大な量のデータ。欠落期間は多いものの、全体で実に七億年に渡る、天文、惑星、生命史、そして文化のアーカイブ。それらを読み解くのは、気の遠くなるような作業だろう。ファーストコンタクトの「現場」である金星に、研究者の集団が大挙して押し寄せるのは時間の問題ではないか。

「問題は山積みです。大きな混乱が、下手をすれば全世界的な社会不安が起きかねない」

「金星知性を敵視する人も出てくるでしょうね。有機マイクロマシン技術を思いのままに操る、惑星サイズ
の知性。その潜在力は想像もつかない。でもね、これは個人的な意見なのですが。わたしは、あまり心配して
いないんです」

「どうしてですか？」

「存在の基盤が違いすぎるから。もし、肉体を備えた、オリジナルの金星知性の文明が今でも続いていた
ら、たとえば地球の豊かな水資源をめぐって、深刻な闘争が起きていたかもしれない。でも、いまや金星知
性は、金星の大気循環を意のままに操るような段階に達しています。とてもじゃないが、」マーサは両手を
上に差し上げた。お手上げ、のポーズ。「勝負にならない」

「来週、国際天文学連合から一般向けプレスリリースを出します」マーサは、目に強い光をたたえ、中田に向かって言った。

「彼らの呼びかけに、行動で応じるべきだ。それも、できるだけ早く。そう、はっきりとしたメッセージを打ち出すつもりです。中田さん、あなたにも、ぜひお力添えをお願いしたい」

「まだ、ただちにご協力を確約することはできません。考えなくてはならないことが多すぎる。しかし、……」中田は、いつとき視線を落とし、それから、マーサにまっすぐ目を向けた。

「最善を尽くします。私たちと彼らの、よりよい明日のために」

中田参事官を研究室から送り出したところには、もう夕刻になっていた。マーサは、夕闇のせまる澄んだ空を見上げた。空に輝く一番星。金星だった。マーサは、不安と安堵のないまぜになった、強い感情を覚えた。とにもかくにも。良きにつけ悪しきにつけ。私たちは、もう孤独ではないのだ。

(Tプラス12 西暦二〇四三年 金星、マアト山上空)

飛行船MA03のコクピットで、私は茶褐色の見慣れた殺風景な金星の景色をVRゴーグル越しに見渡した。いまの季節の気流は穏やかだ。うまくいけばあと五時間ほどでマックスウェル山が視界に入るだろう。ずっと待ち望んでいた、金星最高峰への旅が実現したのは、正直、心躍ることではあった。こんな、せわしない事情でさえなければ。

「MA03、マチコ・ハタノ、アフロディーテ高地に到達。定刻通り」

『マアト山頂基地、マリア司令、了解。安全な航海を』司令の声は、ヘリウム配合ガスの『ダック・ボイス』のせいで子供のように甲高い。しかし、聞き慣れた私には落ち着いた声に感じられた。

マアト山頂基地に不時着してくれていれば、なにも問題はなかったのだ。それをなぜ、マックスウェル山なんかにもちろん、答えは判っている。ただの愚痴だ。マックスウェル山は標高一一〇〇〇メートルの金星最高峰。気圧も気温も、金星の中では最も「まし」な場所だ。平原部と比べれば気温で百度低く、気圧は約半分。次峰のマアト山と比べても三〇〇〇メートル高い。マアト山頂基地にたどりつけないと判った時点

で、マックスウェル山への不時着を選んだパイロットの判断は責められない。とはいえ、そのおかげで、私は本来業務を投げ出し、こんな長旅に出る羽目になったのだ。多少の愚痴は許してもらいたい。

私が乗っている、「飛行船」と呼ばれている機体は、実際には、はるかに「潜水艦」に近い。金星の気圧は平原部で九〇気圧。地球の海なら深度九〇〇メートル相当の圧力がかかっている。この船の、潜水艦なら浮力タンクが収まっている場所には、スーパープレッシャー気球が並んでいる。そこに充填した窒素ガスの圧力をコントロールすることで「深度」を変える。船舶のような小径プロペラが推進力を生む。航空機のような大口径のプロペラは、金星の濃厚すぎる大気の空気抵抗には耐えられないからだ。円筒形のキャabinは、断熱水筒よろしく四〇〇度の気温から私を保護してくれているが、外気との気圧差はない。三週間かけた気圧順応処置の成果だ。救助対象者は、残念ながらまだ気圧順応処置を受けていない。狭苦しい直径三メートルの耐圧救難カプセルの中に、三名のクルーがすし詰めになっている。生命維持装置の性能保持時間も短い。等圧仕様のこの船の三分の一以下だ。保って六日間。死体を回収する羽目に陥るのを避けるためには、急ぐ必要があった。

私は、もともとは日本の南西諸島で、ダイビングのインストラクターを仕事にしていた。そこにたまたま、大深度建設会社の役員が休暇で立ち寄った。その役員に、深海マリンスノーの絶景を吹き込まれて、私は転職した。より深い、より不可思議な世界へ。私は、深海潜水専門の技術者に職を変え、石油採掘リグや、各種サルベージの現場を渡り歩いた。私が、地獄の釜の底のような金星地表までやってきた理由は簡単だ。新たな顧客となった金星知性が、六〇気圧での建設作業を希望したからだ。ちなみに、私をスカウトした役員の現職は、金星公社マアト基地の基地司令。この業界、つくづく狭い。

「現場」のマアト山は、金星第二の高山だけあって、まだ恵まれている環境だ。それでも気温は四〇〇度、気圧は六〇気圧近くある。自動機械は可能な限り多用する構想だったが、機械にはメンテナンスが必要だ。必ず、だ。二十一世紀の人類の工学技術は、まだ、機械だけで機械のメンテナンスを完結させるレベルには達していない。

そこにもし人間を送り込まなくてはならないとすれば、選択肢は二つ。温度も気圧も遮断するか、温度だけにするか。両方の遮断は非常に難しいが、断熱だけなら、耐圧構造はいらない。構造安全性にも、そしてもちろん予算と工期にも、非常なメリットがある。飽和潜水、という、二十世紀からある「枯れた技術」で、

人間の気圧順応は問題なく可能だ。そして顧客は、可能な限りの短工期を希望していた。金星地表に、工業プラントを建設する。そこで人工衛星とエアロスタットを大量生産し、金星周回軌道に打ち上げる。全部で二百五十六機の通信・観測衛星と、一万機のエアロスタット。それが顧客の希望だった。齢七億歳になんなんとする、金星高層大気の微生物生態系に住む群知性クラウド。「金星知性」仮想社会の、それは総意だった。

二〇三一年のファーストコンタクトによって人類社会に生じた熱狂は、いまさら繰り返すまでもないだろう。「金星レース」。国を問わず機関・企業・個人を問わず、ありとあらゆる集団が金星を目指した。そこが、ファーストコンタクトの「現場」だったからだ。

金星知性の仮想社会は、二〇一〇年代から二〇三〇年代にかけて相次いで金星圏に送り込まれた探査機が形作った「フィードバックループ」に相乗りする形で、かろうじてその形を保っていた。特に、NASAの「ダヴィンチ・プラス」探査機に搭載されていた機械学習モジュールは、金星知性の七億年ぶりの「目覚め」に決定的な役割を果たした、と聞いている。

地球が、いまのような「水惑星」の環境を保っているのは必然だ、と、私たちはずっと思い込んできた。

その固定観念を、金星知性は軽々とくつがえした。ほんのわずかの偶然が、七億年の地球生態系の繁栄をもたらした。もし、実際の歴史よりもほんの少し地球の灼熱化が早かったら。金星知性の試みがもしも失敗していたら、または「成功しすぎて」いたら。きわどい綱渡りを経て、今の私たちの地球がある。生き残った私たちは、それを必然と思い込んでいただけだ。そして、その綱渡りは、今もなお続いている。金星知性の経験と支援をもとに、地球温暖化の制御・緩和のための研究が急ピッチで進んでいるが、その成果がいつ形になるのかは、まだ予測を許さない。とある学会会で、金星知性はいったものだ。

「まあね。もしうまくいかなければね、君たちも『こっち』にくれればいい」

「金星クラウドへのマインドアップロード、ですか？」

「そう。まだまだ演算容量の空きはたっぷりあるから、無理をすることはないよ。ハハハ」

それを聞いておぞけをふるった人類の研究者たちが、より一層、地球温暖化克服のための研究に精を出したことは言うまでもない。金星知性のマインドアップロード手法は、「破壊読み出し」、つまり、分子機械

製剤を服用して脳内の電気・化学的配置を切り刻んでデータ化する、というものだったからだ。一度「アップロード」を選べば、起きるのは生物学的には死以外の何者でもない。そのあと、彼らの情報クラウドで再生される意識が、「生物学的死」の前の意識と連続したものか否か、は、答えようがない。金星知性には、他に選択肢はなかった。地球人類には、今ならまだ、選択肢がある。私は、そう思いたい。

彼らは、惑星探査機を使った「仮住まい」より、もっと安定した「自前」の情報インフラの構築を切望していた。NASAの「ダヴィンチ・プラス」「ベリタス」とESAの「エンヴィジョン」、この三つの探査機が、金星成層圏細菌の情報クラウドを連携させるための高速チャネルの役割を果たす前、金星知性は、バケツリレー式の「横」のコミュニケーション手段しか持っていない時期がほぼ七億年続いた。その頃の彼らの「思考速度」は、今の一千万分の一だったという。彼らが成層圏エアロスタットによる情報チャネルを喪失してからの七億年を、かれらは極度の「クロックダウン」でしのいだのだ。七億年を、七十年に圧縮して。その経験は彼らにとってきわめて不本意なものだったようだ。一時しのぎから長期対策まで、ありとあらゆる

る対応策が金星知性から矢継ぎ早に提案された。推進剤切れで運用を終了していたJAXAの「あかつき」探査機までもが、補給・改修ミッションによって定常運用に復帰した。

国際連合の一九四番目の加盟「国」として、人類社会と公式な外交関係を樹立した金星知性は、人類社会と「金星公社」コンソーシアムを共同設立し、金星を取り巻く新たな衛星群の建造を精力的に推進した。金星は、エネルギーと資源に事欠かない場所だ。温度差も気圧差も、容易にエネルギーに転換できる。エネルギーさえあれば、酸素も炭素も、金星大気から無尽蔵にくみ出すことができる。金属資源は？ 灼熱・高温の金星地表には、ビスマスの雪が降る。金属資源には事欠かない。圧力と温度を克服すれば、そこに手が届く。

圧力は飽和潜水技術で克服した。高温も乗り切った。無尽蔵のエネルギーを使った力ずくの冷却と、高温高圧下で『しか』正常動作しない特殊設計の炭化窒素LSIで。金星地表は、もはや死の世界ではない。死と隣り合わせではあるが、そこが私の新たな仕事場だった。

『真知子、具合はどうかね』通信が入った。金星クラウド知性の、今回の救難ミッションの連絡役を担当するサブルーチン。「主任」と呼ばれることをかれは好んだ。カンブリア爆発を引き起こしたミッション「蒔種計画」の立役者の一人、だったのだそうだ。やや偏屈だが、私は、かれのことを嫌いではない。

「往路の九十五パーセントをクリア。順調です」

『熱潮汐流の渦が近い。少し西に迂回したほうがいいと思う』

「了解」ナビゲーションディスプレイに表示された推奨航路をもとに、飛行船の推進器を調整する。

『マックスウェル山には、われわれの最後の地上拠点があったはずだ。できれば予備探査をしておきたい。

むろん、救難活動に影響を与えない範囲で、だけどね』

「ええ、わかっています。公社の地球側の地質学者からも、マックスウェル山の近接探査については依頼を受けています」同乗するといって聞かない地質学者をあきらめさせるために払った努力は、あえて繰り返さなかった。そもそもこの飛行船は単座だ。二人乗りなど試みたら航路の三分の一もこなさないうちに窒息とオーバーヒートで難破必至である。他にすぐ動かせる飛行船もなかった。地質学者は、「今から飛行船の操

船資格を取る」と言いおいて私のオフィスを立ち去った。あの勢いでは、本当にやるかも知れない。まあ、資格取得には半年はかかるだろうけれども。

『救難カプセルとの直接通信が、あと三十分ほどで開通すると思う。マーサや中田とリアルタイムで会話できるのは楽しみだ』

「ご存じなんですね、お二方を」

『ああ。ファーストコンタクトのカウンターパートだったからね』

超一流の研究者揃いのOISTのユニット長に十七歳で着任した若き天才と、金星駐在国連代表。二〇三一年に人類と金星知性がぎこちなく会話を始めた、その当事者の二人が、この先のカプセルで私の助けを待っている。

ビープ音が、救難カプセルとの通信成立を告げる。

『こちらランデイス3救難カプセル。世話をかけます』パイロットの声が聞こえた。

「飛行船MA03です。みなさん無事ですか？」

『はい。電力も問題ありません』

よかった。これでひと安心だ。

『マーサ、中田、「主任」だ。久しぶりだね』

『中田です。こんな形の再会で申し訳ない』

『事故は起きるものだよ。落雷では仕方がないさ』

不運、としか言いようのない事故だった。地球圏から金星成層圏エアロスタットに進入しつつあるシャトルを、強烈な落雷が襲ったのだ。金星知性も、大気循環を隅々までコントロールできているわけではなかった。ブラックアウトした航法システムが再起動を完了する前に、続けざまに突風がシャトルを襲ってスタビライザを引き裂き、エアロスタットへの接舷は絶望的となった。緊急浮力気球の展開も失敗し、シャトルシップ「ランデイス3」は、金星地表への不時着を余儀なくされたのだ。

『マチコ、あなたが来てくれてよかった』マーサだ。まだ多くはいない女性金星勤務者同士、マーサとはしばしば無駄話を交わす間柄だった。

『実はね。頼みごとがある』いやな予感がした。マーサがこの手の声を出すのは、きまって面倒ごとだ。

「カプセルの安全確保が完了するまで、頼みごとは聞けません」毅然とした声を出せた、と思う。

『もちろん。そのあとで大丈夫。MA03の航続距離は充分余裕があるでしょう?』

「それはそうですが」

『ちょっと、帰りに寄り道がしたい』

マーサの「頼みごと」は、予想以上の難物だった。シャトルが不時着するとき、彼女はマックスウエル山頂の直近に、大変な物を見つけていた。「アーカイブ」だ。これを聞いて「主任」は感嘆の声を上げた。

『なんてことだ。マーサと中田が揃ったところに、アーカイブが見つかるなんて。地殻の変動で正確な座標はクラウドにも残っていなかったのに。マーサ、君はツイているよ』

マーサは、アーカイブへのドローン投下を希望した。そして、もしできれば、アーカイブに残されているはずの窒化珪素プレートの回収も。

『金星知性が、休眠期間を通して積み上げ続けた全天観測記録のバックアップ。その一部が、そのプレートに刻まれているはず。クラウド側でも長い間に失われてしまった欠落が、埋められるかも知れない』

「だったら、もっと体制を整えて、本格的な調査隊を組んだほうがいいんじゃないですか?」

『もちろん。本格調査は改めて計画する。だから、これはただの予備調査』要するに、少しでも早くアーカイブの中身を知りたいのだ。

結局、マーサに説き伏せられる格好で、帰路の拡張ミッションを承知させられてしまった。貸しだからね、マーサ。

マックスウェル山の東側のゆるやかな斜面に、シャトルシップは不時着していた。外観に大きな損傷はない。ひょっとしたら後日の機体サルベージも可能かも知れないが、まずは乗員の救助が先決だ。

まず、胴体中央部に組み込まれた救難カプセルを、シャトル本体から切り離した。浮力バルーンを取り付け、外部電力ケーブルを飛行船につなぐ。一連の作業は、船外作業をするまでもなく、マニピュレータだけで無事に終わった。食料や消耗品はまだ保つ。物資の補給は基地に戻ってからだ。バルーンで中正浮力にした救難カプセルを曳航し、飛行船はマアト山頂基地への帰路についた。

金星赤道に近いマアト山頂基地からは、エアロスタットへの「ケーブルカー」が定期運行している。スーパローテーションの定常風を利用した、連風で自重を支えるつくりの準宇宙エレベーター。無理に基地の常圧チャンバーに移ってもらうよりも、カプセルごとエアロスタットに吊り上げてもらったほうがよさそう

だ。そんなことを考えながら、飛行船を、拡張ミッションの目的地である山頂付近に着けた。「アーカイブ」だ。

アーカイブは、長年の過酷な環境によく耐えていた。マーサが目ざとく見つけた、地表にごくわずかに突き出した三角錐のアクセスポートも、原形をほぼ保っていた。これまでに見つかった「アーカイブ」の中では、いちばん状態がいい。三億年ほど前までは、金星知性が残した作業機械がかりうじて動いていて、簡単な補修もできていたらしい。作業機械が故障した後も、五百万年前までは、ここのバックアップサーバーは生きていた、と、「主任」は言った。

『その後の天測データは、クラウドにもほとんど残っているんだが。それより前は、クラウドには要約しかない』

「アーカイブのアクセスポートに、ドローンを投下します。……はい、無事着地。さあ、帰りますよ乗客のみなさん」

『もう少しだけ。ドローンからの映像が見たい』

そう言われるのは判っていたのだが。私も、好奇心に負けてドローンの映像に見入った。ドローンは、アクセスポートの頂点に取り付いて、「主任」から教えてもらった通信プロトコルを試す。

『応答なし、か。無理もないな。これまで筐体の形が残っていたことの方が奇跡だ』『主任』は、さほど落胆した様子もなく言った。

『ここはぜひ再稼働させたい。機材の全面交換が必要だな。金星公社本部に、マックスウェル山頂への拠点建設を進言しておこう』

「また仕事を増やすんですか？」

『増員でも臨時手当でも、必要なものは何でも手配しよう』

「わたしは、それよりも臨時休暇がいただきたいです！」

『それは増員のあと』

私と「主任」の軽口の応酬をよそに、マーサと中田さんの、早口の会話が聞こえてきた。やがて、中田さんの声が聞こえた。

『波多野さん。お願いがあります。この状況でのご無理は重々承知ですが、国連代表として、ぜひ、あなたのお力におすがりしたい』

「伺いましょう」ひどくいやな予感がした。だけれど、相手は国連全権代表だ。そう答えるしかないではないか。マーサは中田さんにいったい何を吹き込んだのか。

『あなたは金星船外活動の第一人者だと伺いました。船外活動で、プレートを回収していただけませんか？』

論外だ。この船は一人乗務だ。もしものがあつたら、誰が乗客をマアト山に連れて帰るのか。

「……それは、国連代表としてのご命令ですか？」

『いいえ。命令できる性質のことではないことはよく判っています。しかし、あまりにも重大な情報が、ここに残されている可能性があることが判明しました。もし万が一、再調査までの間に、アーカイブが構造脆化や火山活動で失われたら、取り返しがつかない。金星知性にとっても、人類にとっても。これはあくまでもお願いです。波多野さん、あなたが、船外活動の専門家として受け入れ不可能なリスクがあると判断されるのであれば、これ以上は申しません。しかし、もしプレート回収が成功したら、』中田さんは、少し言葉

を切った。『金星知性とのファーストコンタクトをもしのぐ成果が期待できる。そう、私たちは考えています』

マアト山の金星公団現地本部とリスク分析を行った結果、安全基準の明瞭な違反ではあるが、一人船外活動のリスクは限定的だ、という結論がはじき出された。

『あとはあなたの意志に委ねます、波多野さん』

「いいでしょう。最善を尽くします」まったく、どうしてこう剣呑な話にばかり吸い寄せられるのだ私は。

「ただし、少しでも危険な兆候が見られた場合は、船外活動は即刻中止。たとえば、そのためにプレートが失われようとも。それでよろしければ」

『それで結構です。ご尽力に感謝します、波多野さん』

コクピットから救難室に移動して、もしものために積み込んできた船外活動服にもぐり込む。ここでも

「飛行船」のつくりは潜水艦、それも深海救難艇によく似ている。これまで、金星地表での船外活動は、二十例しかない。十回は私だ。これまでの船外活動では、すぐ近くにバックアップクルーが待機していて、大

きな不安を感じることはなかった。しかし今回は。もし三重の冷却機構が一斉に故障したら、外は摂氏三八〇度の金星大気だ。これで、金星地表の中では一番「涼しい場所」なのだから恐れ入る。

船外活動服の気密を確認。相棒との相互チェックはできないから、スーツの状態は本部に回線越しに確認してもらう。救難室と外部を隔てるハッチを開く。マックスウエル山、初登頂だ。船で乗り付けたのだから、登山とは言えないけれど。

イアカバー越しに、冷媒がスーツを冷却する鋭い音が響く。船は四本のアンカーケーブルでアーカイブに固定した。アクセスポートは真下だ。ゆつくりと、足から船外に出て、アクセスポートに取り付く。

何でもゆつくり、少しずつ。それが金星船外作業の鉄則だ。五十気圧の大気、それもほとんどが比重の大きい二酸化炭素だ。水中のような、粘りつくような空気抵抗で、手も足も思うようには動かない。同じ気圧でも、いま私が呼吸している、呼吸を楽にするためにヘリウムを配合したハイデリオックス・ガスとは大違いだ。

着地すると、ほんのりと足の裏が暖くなる。こればかりは慣れることができない。冷却装置と幾重もの断熱被覆越しに、金星の「地獄の釜」をじかに感じるのは。

「マチコ、回収作業に入ります」カプセルの三人と本部、そして「主任」に声をかけると、私はアクセスポートの前の足場に立った。極限作業ドローンが、ゆるりと脇に退く。

「アクセスポートの保護パネルは開放位置で固定されています。プレートの手動取り出しレバーは……少し砂塵が積もっていますが、操作に支障はなさそうです」ドローンも、本船も、このレバーを操作できる形と大きさのマニピュレータを装備していなかった。ただそれだけのために、私は船外作業を余儀なくされたのだ。

「主任、次にここを模様替えるときには、地球のマニピュレータにレバーの規格を合わせることをお忘れなく」

『覚えておこう。約束するよ』

超・時代物のレバーは、固着の様子もなく、ゆるやかに動いた。固着していたらただちに帰船する取り決めだったのに、拍子抜けだ。この超絶信頼性を実現するために金星知性がどれほどの技術をそそぎ込んだの

かは、想像もつかない。ミトン型の断熱グローブ越しに、私は、レバーに刻まれたくぼみを感じ取った。金星知性の鉤爪に合わせたくぼみを。

「スリットが露出しました。プレートが出てきます」濃い灰色の、厚さ是指一本くらい、幅と奥行きはそれぞれランチプレートの半分くらいの板がゆるやかにすべり出てきた。落とさないよう、しっかりと両手でプレートをつかみ、抜き出す。ずっしりと重い。その表面には、微細なドットが無数に刻まれていた。はるかな未来に記録を伝えるために、金星知性は、この板にマイクロドットを彫刻する方法を選んだのだ。

『一枚だけ。それだけでいい。最重要のデータはその一枚に収まっている。残りは次のチームに任せよう』
「主任」が言った。

考えるな。私は、自分に言い聞かせた。これが、金星知性の七億年の空白を埋める最重要のピースだというのを、考えるな。ただの重たい、取り回しの厄介な板にすぎない。いつものように、グローブの超耐熱性吸盤が、板をがっちりとホールドしてくれるはず。万に一つも、手が滑る、ということはありません。しかし、どうしても想像してしまう。手から滑り落ちるプレート。濃密な大気のなかをゆっくりと、しかし、

伸ばした手のわずかに先をすりぬけて、金星最高峰の急峻な斜面を転げ落ち、露出した岩にぶつかって微塵に砕け散る七億年の記憶。

「プレート、取り出しました」七億年の時を越えて、わずかなフリクションとともに、プレートをアクセスポートから抜き取った。無意識に止めていた息を吐く。両手でしっかりと捧げ持ったプレートを、船外服の右ひざに取り付けられたポーチに……。そこで私は、自分の救いがたい馬鹿さ加減を呪った。

「ポーチのフラップを開き忘れました。すみません、いったんプレートを戻すしかありません」もし、粉塵がはさまってプレートが収まらなかったら。繊細な彫刻を施したプレートの表面が、スリットのエッジで削れたら。最悪の可能性として、プレートを差し込むはずみに、長年蓄積された応力を抱え込んでいるであろうプレートが割れてしまったら。それでも、プレートは片手で安全に支えられる重さではない。戻すしかない。自由のきかない船外服では、「プレートの角でフラップの開放ボタンを押す」などという芸当は無理だ。もう、泣きたい。

『待って。そのまま。ドローンで開けさせる』マーサが、ドローンの精密マニピュレータをリアルタイム操作した。小枝のように細長いマニピュレータの先端が、そっと、ポーチのフラップ開放ボタンを押す。フラップがゆらりと起き上がり、ポーチの開口部が露出した。

「ありがとう、マーサ。……プレート、収容しました。グローブの吸着解除。フラップ閉鎖」こんどこそ、私は大きく息を吐いた。

「レバーを定位置に戻し、保護パネルを閉鎖。ドローンは状況モニタリングのためにここに残します」

『プレートは急冷すると破損の恐れがある。船に戻ったら、断熱ボックスに移すことを忘れずに』

「了解です。帰船します」

本部からの遠隔操作で、私はゆっくりと救難室に吊り上げられた。「恩人」のドローンに、私は小さく手を振った。アクセスポートの横にたたずむ、大きさも形もバスケットボールくらいのドローン。ドローンは、マニピュレータとセンサ類をすべて自らの筐体のなかに収容すると、待機姿勢をとった。忠実な衛兵のよう。

船のハッチが静かに閉じた。今度こそ、まず断熱ボックスの蓋を開く。次にポーチのフラップを開放し、プレートを取り出して、万が一にも縁にぶつけないように、慎重にボックスの中に安置。不自由な船外服で、ぎこちなく緩衝材を詰め終え、ゆつくと断熱ボックスの蓋を閉じる。そして、やっと救難室の冷却を開始。これには三十分かかる。

『ありがとうマチコ。早速なのだけれど』マーサだ。言いたいことは判っている。

「残念だけれど、断熱ボックスにはカメラは付いていません。基地に戻るまでは、スーツのカメラで撮った画像で我慢して」

『裏は？ 裏側の映像はないの？』

「ありませんったら！」撮れていた画像をまとめて救難カプセルのマーサに送ると、彼女はやっと静かになった。

マアト山頂基地への帰投に三日。プレートの冷却完了と細心の注意を払った梱包に半日。嚴重に保護されたプレートを救難カプセルに積み込むと、三人の救助対象者は無事、成層圏エアロスタットに向かって準宇

宙エレベーターで旅立った。やっと任務完了だ。私はようやく、心休まるルーチンワークに戻ることができた。マックスウェル山の二次調査は、体制と機材を整える必要があるから三ヶ月は先だ。新拠点建設はさらに先、年の単位のプロジェクトになるだろう。それまでは、手元のお仕事に専念できる。なにしろ、私の顧客の目標は壮大なのだ。

一週間後の非番シフトに、マーサからプライベート着信があった。

「マチコ。やっと、プレートに残されていた情報のあらましが見えてきた。ちょっと凄いよこれは」

「なによ。天文学的大発見なんでしょう？ 今度も」ここ十年ほどの宇宙科学のブレイクスルー続きで、私は少々のことでは驚かなくなっていた。

「なら、これではどう？ 『相対論の局所的破れ』の実験的証拠」

「……もうちょっと、わかりやすく言ってもらえると助かる」

「じゃあ平たく言うと。『ワープ航法』の痕跡が見つかった」

マーサが語ったのは、四億年前の、太陽をかすめてどこからともなく出現し、消失した、明らかに人工物の特徴を備えた物体の映像だった。

「たとえばね。監視カメラを森の奥深くにセットして、低速度撮影でずっと回し続ける。警戒心旺盛な野生動物が、人気がなくなっただころを見計らって、そっと顔を出す。そんなことが起きたのではないか、と、「主任」と中田さんは考えている」

「誰も見ていないと思って、こっそりと、……ワープ航法で？」

「そう。大質量近傍でのみ生じる『相対論の局所的破れ』の存在。それを利用した、超光速航行を操る知的生命体。その証拠が、見つかった」

もし、超光速航行が実現可能なのだとしたら。それは確かに、「ファーストコンタクトをものぐ成果」だと言えるだろう。

「……いったいどうなるの、これから」

「どうするの、よ。問うべきは。金星知性は、ワープ再現実験の立案に余念がない。微生物群知性の一部をすくいとって、軽量でコンパクトな培地に移植する計画にも手をつけている。『主任』は、自分自身がそれに乗って来訪者の故郷に乗り込む気満々」

「たしかに、あの『人』ならそうだろうな」

「ここまで来たら、金星知性と人類は、手を携えて恒星間宇宙へと乗り出していくしかないと思う。もちろん危険はある。『来訪者』の意図は、今のところ皆目見当がつかない。無邪気に踏み出した一步先が断崖絶壁、という可能性はもちろんある。いくら慎重に振る舞っても慎重すぎるということはない。でもね」

赤みの差したマーサの顔を、私は、まるで子供みたいだ、と、くすぐったい思いで眺めた。

「要するに、行ってみたいんでしょう？ 来訪者の故郷に」

「もちろん」マーサは、何を当たり前のことを、とでもいうように応じた。

「あなたはどう？」

「物騒なのは嫌だな。もうちょっと、落ち着いた暮らしがいい。……でも、まあ、見てはみたいかな。来訪者のふるさとを」

「じゃ、決まり。一週間後にまた」マーサは、プツン、と回線を切った。

やれやれ。一週間で何をどう進めるのか、は、おおよそ察しがついた。国際天文学連合。金星公社。複数の巨大産官学複合体。それらに、ワープ航法実現の可能性、という火種を楽しげにバラまくマーサと、それに翻弄される人類社会。十二年前の再現だ。私は、中田さんに深く同情した。

私は、基地駐在の地質学者に連絡を入れた。

「イワノヴァ先生、マチコです。もし、ご興味があれば、なのですが。私から、飛行船操縦の個人的レクチャーを受けてみよう、というお考えはありますか？ ……どうも、『引き継ぎ』の準備を始めたほうがよさそうな予感がしてきたので」